



2013年度世界8大学国際学生フォーラムに参加して

王 冲 先生
大連理工大学

1. フォーラムのプログラムについて

震災復興と国際連携というテーマを中心に、日本人学生の英語によるポスター発表、学外見学、海外の学生のプレゼンテーション、テレビ会議などが行なわれ、実に豊富なプログラムであったが、スケジュールにも余裕を持たせてあり、じっくりと反芻することができるといった内容であった。

10日の午前中は日本人学生が国際連携、ボランティア、複言語・複文化主義、国際政治の四つのテーマについて、英語でポスター発表を行い、参加者は順番に見て回ったり、発表者と個別に討議したりすることができた。また、その後、各テーマについて活発な議論も行なわれ、参加者はそれぞれ自分が興味のあるテーマについて、質問したり、意見を述べたりして、非常に意欲的であった。

11日の農林水産省の見学では、参加者は震災関連の展示を見たり、講演を聞いたり、実際に震災復興に関する現状及びどんな課題に取り組んでいるか、より分かりやすく、深く理解できたに違いない。

12日にはテレビ会議という形で、モナシュ大学に留学している日本人学生から英語による災害に関する発表が行なわれた。まさに世界は小さい、世界は一つとつくづく感じた。今後大連理工大学の国際交流もテレビ会議のような形で、範囲を広げていこうと思う。

13日に海外の学生達は災害復興に対して、大学生には何ができるかについて、それぞれの国の経験に基づいた考えを報告し、非常に興味深かった。留学生のみなさんはそれぞれの言葉の壁を乗り越えて、一生懸命に自分の考え、気持ちを頑張って相手に伝えようとしている姿に非常に感心した。

他方では、14日に実際に被災地で実習をしていた日本人学生と現地の方から震災復興に関する話、ドキュメンタリー映画の上映などもあって、これはまた参加者の誰にとってもインパクトの強い経験であったと思う。

このフォーラムを通して、日本人の学生も、海外からの学生も、震災復興及び国際連携に対する意識を高めるきっかけになるのみではなく、視野を広め、異文化を体験でき、さらにコミュニケーション能力を高め、異国の友達を得ることができたのではないかと思う。

また、西山先生の複言語主義に関するご講演に、言語教育者としての私は深く共鳴した。日本において、抱える課題は多くあるようであるが、この機会を始め、是非今後の日本語教育に複言語・複文化の考えを生かしたいと思う。

2. フォーラムの運営について

受け入れ側のお茶の水女子大学の先生と学生達に

は、海外との連絡から留学生の面倒、フォーラムのしおり作成、歓迎パーティーの準備、そしてゲームに至るまで大変お世話になった。様々な場面で、お茶の水女子大学の学生の熱心さと行動力は印象的であった。またオーストラリアとのテレビ会議を含む運営がスムーズに行なわれたのはお茶の水女子大学の高いコミュニケーション能力とリーダーシップ能力である。

3. グローバル人材の育成の観点から見た フォーラムの意義

近年、国境を超えて活躍できる「グローバル人材」の育成が盛んに議論されているが、それを考えるにあたって、複言語教育と複文化教育はとても重要な切り口になっていると思う。複言語能力は複数の言葉でコミュニケーションを行なう能力であり、教室で育成することができるが、複文化能力はむしろ教室以外の環境で形成されると考えられる。実際に異文化に接し、自文化と他文化を比較し、違いを発見することで、自文化と他文化をより客観視できるようになると思う。そのような意味において、世界8大学国際学生フォーラムは複言語・複文化の環境を提供してくれたと言える。また、日本語教育者として、今後複言語・複文化の考え方に基づくカリキュラムをどのように実際の現場教育に導入できるかは、新たな課題として見つけることができた。

だいたお茶の水女子大学の皆様に心より深く感謝を申し上げたいと思う。日本の学生達と海外の学生達の更なる発展を心から願う。

最後に、今回のフォーラム開催に向けてご尽力いた



2013年度世界8大学国際学生フォーラムに参加して

中井 仙丈 先生

チェンマイ大学人文学部日本研究センター

2013年度世界8大学国際学生フォーラムは、お茶の水大学グローバル教育センターとグローバル人材育成促進センターによって企画・開催され、お茶の水大学の提携大学7校が参加して行われた。各大学から2名ずつ学生が選拔され、日本に招へいされた。2011年3月11日に起きた東日本大震災を題材に、お茶の水大学を含む8大学の学生が発表、意見交換、被災者との対話を行った。

まず、フォーラム初日の9日にはお茶の水大学の学生さんたちによるキャンパスツアーと池袋防災館の見学に参加した。その合間に参加者が顔合わせする時間も取られており、効率よくスケジュールが組まれていた。また自然災害の少ない国々から来た学生たちにとって防災館の見学は役に立つ体験だったと思う。

10日にはヴァッサー大学に短期留学したお茶の水大学の学生からパネル発表が行われた。この発表は「東アジアにおけるアメリカの役割」、「日米のボランティア活動に対する見方の相違」、「民間外交における文化の役割」、「複言語主義」の4テーマに分かれていた。午後は引き続き外部からゲスト講師を招き、ヨーロッパにおける複言語主義と欧州共同体が行った東日本大震災被災者への救援活動の報告があった。

11日は午前中が農林水産省を訪れ、放射能汚染除去作業や被災地産の農産物への不安緩和策などにつ

いての説明を受けた。午後は日比谷公園に移動し東日本大震災追悼イベントと六本木で開催されたグーグルの震災関連展示会を見学した。こうしたイベントに参加することで、日本社会で続けられている震災復興への取組を垣間見ることができた。この時期に日本に滞在しているからこそできる貴重な体験だった。

12日はお茶の水大学にてモナシュ大学に留学する日本人学生から災害に関する発表を聞いた。費用面で慢性的な問題を抱えるタイの大学で教鞭をとる私にとっては、こうした取り組みは大変参考になった。

13日は8大学の学生たちが各国で起きた自然災害と被災者への援助に関する発表を行った。災害という同じテーマでありながら、見方や対応が異なることが分かった。異文化との接触は必ずしも心地よいことばかりではないが、この違和感こそが異文化理解への第一歩になるはずだ。

14日は陸前高田での「地域研究実習II」の報告と被災地で活動する方々から話を聞いた。昨年と比べ一歩踏み込んだ発表がなされていた。震災から時間がたつにつれて見えてくる課題や被災地の状況がわかり非常に興味深かった。また悲話や美談としてまとめてしまわなかったところに好感がもてた。現実の複雑さから目をそらさずに困惑や驚きを表現していたことに感心した。また午後の部では、震災復興に尽力されている映画監督、支援団体、地元自治体の代

表から、現在の復興の状況や課題について説明があった。

今回のフォーラムは昨年と比べ改善された点がみられた。学生の交流を活性化させるための工夫や議論の深みが感じられた。最初のフォーラムから3年目を迎え、これまで培ってきた知識や経験が生かされていた。こうした大きなイベントを企画・運営し、さらには学生間で討論を重ねたことは、社会人になった際の貴重な財産になるはずだ。

今後日本は否応なしにグローバル化が進むであろう。こうした異文化との対話の場がもたれることは重要だと考える。若い世代が異なる価値観をもつ世界と接触し、自分なりの考え方をもっておくことは大切なことだと思う。外国で日本語を学ぶ学生たちにとって、今回のようなリラックスした雰囲気の中で日本語を聞いたり話したりできる機会をいただけたことは貴重な経験だったはずだ。教室を飛び出して、異なる文化的背景をもつ仲間と対話を行えたことは彼らにとって「気づき」の場であっただろう。

震災から3年がたち復興が進む中、簡単には癒すことのできない心の傷や地元経済の復興といったテーマに対しては、すぐに答えがでるわけではない。しかし、今回気づいたことを、社会人として、または研究者としてこれから深めてゆけばいいと思う。

また今回のフォーラムはスケジュールがゆったり組

まれており、学生たちの疲労も少なかったのではないと思われる。参加者全員が話に加われるような工夫が凝らされており、学生たちは非常に充実した時間を過ごすことができた。末筆ではあるが、森山先生をはじめ、越智先生、事務の長塚さん、お茶の水大学の学生さんたちに心よりお礼を申し上げたい。



Message from the Conference Chairman

FORUM2014 Conference Chairman & Founder Professor

森山 新 教授

お茶の水女子大学グローバル教育センター長

3.11東日本大震災から3年の歳月が経った。復興は少しずつ進んでいるものの、まだ十分と言うにはほど遠く、とりわけ地震・津波の被害に加え、福島第一原発の被害を受けた福島の復興は多くの課題を残したままだ。3年前、私たちはヒロシマ、ナガサキに加え、フクシマの被害を経験した国民、世界で唯一3度にもわたり核の恐怖を味わった国民として、ノーモア・フクシマ (No More Fukushima) を胸に誓ったはずだ。その後世界の国々の中にはドイツなど、積極的に脱原発を掲げ、代替エネルギーへの転換を図っている国々が出現した。しかしながら、今の日本は3年前の悲劇を忘れ去ってしまったかのように、脱原発どころか、原子力への回帰を図ろうとしているかのようで、原子力技術の海外輸出にも積極的になっている。

2月、我々は14名の学生を連れ、太平洋を渡り、アメリカ・ヴァッサー大学の地で初めて海外での国際学生フォーラムを開催した。海を渡りながら、私の心の中には一つの大きな不安があった。それは現在の日本ですらこのように東日本大震災の風化が懸念されている中、海を越えたアメリカの、しかも東海岸のヴァッサーの学生たちは、果たして他国の我々を暖かく迎え、この他国の大災害を今も覚え、心痛めてくれるだろうかといった思いであった。

ヴァッサーの地で行われた3.11メモリアルイベントでは、本学の学生のうち、宮城と福島で被災した学生2名が自らの体験を切々と語った。ヴァッサーで

学ぶ学生からは遠い日本での大災害に向けての熱い思いが語られ、また二度とこのような悲劇を繰り返さないためのプランが発表された。また震災直後、ヴァッサーの地で、チャリティコンサートを開催し、遠く日本の地に激励と支援の手を差し伸べてくれた学生3名が「心の声」を再び演奏し、我々に感動を与えてくれた。さらに3回にわたり行われた研究発表会では、国際交流や相互理解のために若者は何ができるか、何をすべきかについての発表が、日本側は英語で、アメリカ側は日本語で語られた。

訪米期間中、我々16名はヴァッサーの学生とともに、ニューヨーク、マンハッタンを訪れた。私はそのとき、9.11の大惨事を被ったグラウンドゼロを再び訪れた。そこには現在、9.11メモリアルミュージアムが建設されており、大惨事を今に伝えていた。その中に、奇跡の一本松ならぬ「サバイバー・ツリー (生還の木)」を発見した。これは9.11の瓦礫の中から傷つきながらも奇跡的に発見された一本のマメナシの木だ。奇跡の一本松とサバイバー・ツリーのマメナシ。3.11と9.11。それらを比べながら、今回我々がこうしてアメリカの地で、初の国際学生フォーラムを開催したことの意味を痛感することができた。3.11を忘れないでほしいという思いは、我々には9.11を忘れないでほしいことを意味する。自分の国の惨事と他国の惨事とを同じ目で、同じ心で、見つめられる姿勢。それが若者に求められており、そのような心で世界の学生の心が一つになり、ともに生きること。これがこの国際学生フォーラムが目指すものである

ことを強く感じた。

2週間後の3月7日、今度は世界7か国から14名の学生を本学に招き、第3回国際学生フォーラムの後半の部が始まった。そこでは、それぞれの出身国で起きた大災害とそれに対しどのような救援・復興が行われているかが紹介された。私たち日本人は、日本だけが苦しんでいるかのような錯覚に陥りがちであるが、世界では様々な災害が起きており、それらに対し無知であったり、真剣に、親身に考えていなかったりした自身を反省せざるをえなかった。また、発表の中には、復興支援の一つとして本フォーラムのような国際交流の意義を語る発表が2例あり、我々がこのように毎年フォーラムを開催することの意義を感じ、少しばかり嬉しい気持ちにもなった。このほか、世界で展開されるボランティア活動に関し、日本の若者が決して積極的であるとは言えない実態を感じ、反省せざるをえなかった。

3月14日には被災地の一つ、陸前高田で実習を行った学生たちの発表と、被災された方々のお話を聞く機会が与えられ、3年前の悲劇と、とかく傍観してしまいがちな我々が何をすべきかについて、心と頭を使う場を持つことができた。

世間ではこの大災害を忘れてしまったかのような様々な動きが起きている。自身、自国の悲しみに心痛めることはだれもができるが、他人、他国の悲しみを自身の悲しみととらえ、立ち上がるためには、

私たちの心の偏狭な壁を取り除き、より広い世界に目を向けていく心のグローバル化が必要である。今回のフォーラムは世界8か国の学生たちが国境を越えた友情を結び、それぞれが抱える様々な痛みを共有することで、我々の心が国境を越えてつながり、行動を起こして行く力を付与してくれたと確信している。学生たちはそれぞれの母国に旅立って行くが、ここで結ばれた絆は深まることはあっても失われることはない信じたい。